

**研究紹介** **Rhif 14**

Jones, Glyn. E. (1984). 'The Distinctive vowels and consonants of Welsh'. In Ball, Martin J. & Jones, Glyn E. (eds.) *Welsh Phonology* (Cardiff: University of Wales Press) pp.40-64)

小池 剛史

日本でカムライグ語を学習しようとする、水谷宏氏著『毎日ウェールズ語を話そう』を除き、英語で書かれた学習書に頼らざるを得ない。英語で書かれた学習者は、英語が分かる人のために書かれたものである。従って、英語の分からない学習者は門前払いとなる。カムライグ語の発音について言えば、例えば「カムライグ語の<y>の発音は、英語の sofa, butter の発音である」(Gareth King (2000) *Pocket Modern Welsh Dictionary* Oxford University Press の冒頭 (xiv) の‘Guide to pronunciation’) といった風に書かれている。しかし、英語の butter の発音が分からなければ、この説明では分からないのである。また、カムライグ語と英語には類似してはいるがその調音（発音する際の舌、唇の位置・形状など）が微妙に異なるものが多い。カムライグ語をカムライグ語母語者のように発音することを学ぶには、英語の記述から独立し、カムライグ語の発音を純粹に音として記述したものが必要となる。ここで紹介する論文は、カムライグ語にはどのような音があり、それぞれどのように調音されるのかを体系的に記述したものである。1984年出版ということで今は古くなってしまったが、その当時は英語で書かれた、カムライグ語の音韻体系を体系的にまとめた最初のものであった。

本論文のタイトルに *Distinctive* とあるが、これは「区別すべき」という意味である。言語学用語として「弁別的」と訳される。これは、その言語の母語話者が一つの音と認識し、他の音とは区別している音、ということである。例えば、*hi* /hi:/「彼女は」と *chi* /çi:/「あなたは」 *ci* /ki:/という三つの語は、語頭の子音 /h, ç, k/ だけで区別されている。この三つの音を区別しないことにはこれら三つの語は区別出来ないことから、この三つの音は、カムライグ語話者にとって異なる三つの音（音素）として認識されていることになる。音素は / / (スラッシュ) で表記する。それに対してカムライグ語の *l* (エル) の発音は逆の例である。英語の場合と同様、*l* は舌先を上歯茎の裏に付けて発音するが、南部では舌先だけでなく舌の前面を含めた広範囲を歯茎にべったりと付けて発音（明るい *l*, ‘clear l’ : 国際音声字母では *l* と表記）すると言われる。逆に北部では、舌の先のみを歯茎に付けて発音（暗い *l*, ‘dark l’ ; 国際音声字母では *ɫ* と表記）すると言われる。*l* の発音を含む単語（例 : *annwyl* /anwil/ 「愛しの」「愛する」）

を「暗い l」で発音しようと「明るい l」で発音しようと、同じ一つの語として認識される。つまり、「明るい l」と「暗い l」という二つの音は、一つの音（音素 /l/）の異なる現れ方（異音：[l], [ɫ]）に過ぎないわけである。異音は角カッコ [ ] で囲って表記する。本論文は、カムライグ語において単語を識別するに当たって区別しなければならない音（音素）を、子音・母音（単母音・二重母音）に分類し、体系的にまとめている。

音素の体系（音韻体系 *phonological system*）は方言によって異なる。本論文では南部方言（特にポウイス州南部 *Llanwrtyd* 地域の方言）に基づいた音韻体系を記述しているが、適宜その他の方言にも言及している。

更に、それぞれの音素が実際どのような口の動きを伴って発音されるかを詳細に説明している。上述の l の発音の場合と同様、音素は、地域方言によって発音のされ方が異なる。また、ある一つの音素の前後にどのような音があるかによっても、発音が異なる。こういった、一つの音素の様々な現れ方（変異 *variants*）にも言及している。ここでは、カムライグ語にも英語にもあるが発音の仕方の異なるものの例の一つ、「破裂音」の /p/, /b/ ; /t/, /d/ ; /k/, /g/ についての記述のみ紹介する。

破裂音は、舌を持ち上げたり唇を閉じるなどして口腔内のどこかで閉鎖を作り（つまりそこで一瞬息が止まる）、その閉鎖を開放することによって生じる音である。/p/, /b/ は両唇を閉じて、/t/, /d/ は舌を上歯の裏（歯茎）に付けて、/k/, /g/ は舌の奥を軟口蓋に付けて、閉鎖を作る。それぞれの対 /p, b/, /t, d/, /k, g/ は閉鎖の起こるところ（調音点という）が同じである。これらの音声記号は英語の音声表記でも使われているので私たちにも馴染み深い。しかし、英語の /p, b, t, d, k, g/ とは発音の仕方が異なるので注意が必要である。

英語の場合、/p, b/ の区別は、有声音か無声音（声帯の振動を伴うか否か）かである、と言われる。ところがカムライグ語の場合は、有聲無聲の違いよりも、閉鎖の開放時に息のもれを伴う（帯気音）か否かの違いの方がはるかに大きい。これは英語の場合にも、/p, t, k/ の発音は帯気音を伴うが、カムライグ語の場合にはこれが顕著である（*peth* 「物」 [p<sup>h</sup>eθ] : *tad* 「父」 [t<sup>h</sup>ɑd̥] : *cath* 「猫」 [k<sup>h</sup>aθ] : *twp* 「間抜け」 [t<sup>h</sup>up<sup>h</sup>] : *het* 「帽子」 [hɛt<sup>h</sup>] : *C* 「(文字の) C」 [ɛk<sup>h</sup>]）。カムライグ語話者は、/p, t, k/ は強い帯気音を伴って発音するため、彼らが英語を話す際にも、英語の /p, t, k/ の音を同様に、英語以上に強く息をもらして発音する。これが *Welsh English* の大きな特徴の一つとなっている。

「有声音」と言われる /b, d, g/ の発音も、実際には「無声音」になることが多い。この現象は、語頭や語末では顕著である（*bys* 「指」 [b̥is]（音声記号の下の (̥) は本来の有声音が無声音化することを表す） : *dydd* 「日」 [d̥ið] : *cig* 「肉」 [kiɡ] :

mab「息子」[mab̥]).

これらの破裂音が/s/音の後に現れると、帯気音を全く失ってしまう (/s/の後では、帯気音の有無の対立は失われるわけである)。カムライグ語には sp- や sc- を含む綴りがほとんどないのはそのためである (st- の綴りはある : stori「話し」 eistedd「座る」)。この現象は、英語からの借用語に顕著である。英語には、sp-, sk-, sc- という綴りを含む語は多数ある (sport, skirt など) が、これらの子音連続の中の p, k は、帯気音を伴わずに発音される。この事はカムライグ語でも同様である。カムライグ語の場合、これらの (英語の) /p, k/ は、帯気音を伴っていないために、/b, g/ と認識されてしまう。sbâr (< spare), sbort (< sport), sbectol (< spectol), sbel (spell 'time'), sgip (< skip), sgwâr (< square), sgert (< skirt) など、英語からの借用語で、元々の sp-, sc-/sk- が、カムライグ語では sb- sg- となっているのは、そのためである。